法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-04-02

# 〈随想〉《鐘巻》を復曲して

ニシノ，ハルオ / 西野，春雄

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
46
(開始ページ / Start Page)
105
(終了ページ / End Page)
108
(発行年 / Year)
1992-12-15
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019657

随想

# 《鐘巻》を復曲して

西野春雄

法政大学能楽研究所では、去る六月九日、午後六時から東京千駄ケ谷の国立能楽堂で、創立四十周年記念の第四回試演能を開催した。演目は《道成寺》の原作《鐘巻》。この曲は室町時代までは上演されていたらしいが、江戸初期以降、廃絶していたもので、約五百年ぶりの復曲ということになる。制作に取り組んだ者の一人として、感じたことなどを綴ってみたい。

《道成寺》は現在最も人気の高い曲のひとつで、つい最近も、平凡社の別冊『太陽』が《道成寺》一曲で特集を組んだ程であるが、《鐘巻》はその原点であり、《道成寺》から近世の浄瑠璃や歌舞伎や舞踏の、いわゆる「道成寺物」に至る道成寺戯曲の源流に位置する作品である。

人気随一の《道成寺》は原曲《鐘巻》の詞章を大幅に削除し、その代わり、緊張感あふれる静寂で異様な〈乱拍子〉と、堰を切った奔流のごとき〈急ノ舞〉を挿入し、落下する大きな鐘に飛び込む〈鐘入り〉といった、技術本位の作品に生まれ変わったが、大幅な詞章の削除のため、物語の背景をなす道成寺建立の縁起世界も、恋に破れた女性の哀しさといった主題も希薄となった。秘事・口伝に満ちた〈乱拍子〉部分が肥大化し、戯曲としての統一性や一貫性を犠牲にしてきたことは否めない。

能楽研究所が《鐘巻》の復曲に踏み切ったのは、シテをお願いした観世流シテ方で銕仙会の中心メンバーの浅見真州氏（文学部日本文学科卒業）の希望と、我々との意見が一致したからだった。

しかし《道成寺》は普通の能より費用がかかる。その原作の《鐘巻》もそれ以上の出費が見込まれる。しかも計画段階では、変更がなかったのに、四月からワキ方・狂言方・囃子方の出勤料（出演料）が大幅にアップした。当初大学当局に提出した予算案では不可能に近い。ここを乗り切らないと実現しない。

予算計画をやり繰りし、ポスターやパンフレット・当日配る謡本などは自分達で作って、できるだけ出費を抑えるとともに、これまでの招待制に代えて低廉ながらも有料にすることにした事情を出演者の方々にも説明し、大学側からは入場料収入を見越したギリギリの増額予算案を認めてもらい、何とか実現に遭ぎ着けた。表ゼミ出身で私の二年先輩である浅見真州氏の、献身と犠牲の上に成り立ったといっても過言ではない。持つべきものは「良き師、良き友」で、日頃からの交友と愛校心が難事業を乗り越えさせたといってよいが、あらためて大学当局のご理解に感謝申し上げたい気持でいっぱいだ。

《鐘巻》復曲の意図は、《道成寺》を技術偏重から解き放ち、前シテの女が中世の舞姫白拍子であることを重視して〈白拍子ノ舞〉を創造し、現行《道成寺》の長所を取り入れつつ、原点である《鐘巻》本来の戯曲世界に立ち返ることにあった。

両曲は結末も違う。《道成寺》は祈り伏せられた蛇体（後シテ）が「日高の川波、深淵に飛んでぞ入りにける」と激しく幕入りするが、《鐘巻》では、

鐘に向かってつく息は、猛火となって、炎にむせべば、身を焦がす悲しさに、日高の川波、深淵に帰ると見えつるが、またこの鐘をつくづくと、またこの鐘を、つくづくとかへり見、執心は消えてぞ失せにける、執心は消えて失せにけり。

と、女の執心も消えるかのようで、一抹の哀愁感さえただよう。ここも復曲のポイントになる。浅見氏を交えての台本検討会を重ねていくごとに、現在の《道成寺》のように蛇身の恐ろしさ凄まじさを強調するのではなく、鐘に取り憑いた女の悲しさ、恋に破れた女性の哀しさ寂しさを表現したいとの思いを強くした。女の情念を昇華させ、蛇性を離脱し《鐘巻》の秘める女の悲しみの流露を意図したのである。

しかし、勝負は舞台にある。基礎となる台本がしっかり整備されていないと破綻する。《鐘巻》の復曲台本の底本には、素性が良いと判断して元禄二年（一六八九）正月林和泉掾刊の番外謡本を用いたが、謡本としてのみ伝わったためか、実際の上演には不備な点や詞章の重複があり、アイやワキのセリフの省略も多い（ただシカシカとのみ表記）。そうした問題点は、ワキ方や狂言方の意見をうかがいながら、能研側のスタッフ（表・西野・田口・山中）に浅見氏を交えた台本検討会で討議を重ね、適宜改定や創作した。作曲・作舞は浅見氏が担当し、囃子方や地謡の方々と諸氏と相談しつつ進め、見事に仕上げた。

復曲には、演出意図をしっかりと表現できる技術が必須だ。そうした技術の錬磨の上に立って、はじめて観客を魅了し、感動の花を咲かせることもできる。能はシテひとりでは成り立たない。ワキ方も狂言方も囃子方も、そして地謡の面々も、それぞれが技を発揮しつつ、力を一つにして舞台を創造していく。観客との共感・共鳴の上に「花」が咲く。

その点、今回は少しも心配はなかった。出演者は創立三十周年記念第一回試演能《世阿弥本による雲林院》以来の銕仙会の方々であり、ワキの宝生閑・笛の一噌幸政・小鼓の北村治・大

鼓の柿原崇志・太鼓の金春惣右衛門氏は、観世寿夫記念法政大学能楽賞の受賞者や催花賞に縁のある方で、地謡は銕仙会の精鋭たち、シテとの呼吸が大切な鐘後見も観世銕之丞氏（浅見氏の《道成寺》ではいつもお願いしている）をはじめ後見の観世栄夫氏ほか、皆さん腕揃いで、現在望み得る最高の配役が実演したからである。

当日の舞台は、見る人の感動を呼びさましたようだ。白拍子は、十二世紀に起こった高級な遊び女の名であるとともに、その遊び女の舞出した舞曲の名でもある。今様や朗詠などを歌うことが多く、水干に立烏帽子で白鞘巻きの太刀を差すといった男装で舞ったのが始まりというが、当日の前シテも中世の白拍子もかくやらんと思われる白き水干に紅の袴、烏帽子を着け、太刀を佩いた華麗な風姿であった。曲中の、道成寺建立縁起の曲舞も法会にふさわしく、冒頭の「花の外には松ばかり、暮れ初めて鐘や響くらん」から「それ祇園精舎の鐘の声は、諸行無常の響きたり、娑羅双樹の花の色は、生者必滅の理なり」と語り舞いするうち白拍子の芸に惹かれてゆく。この曲舞も原作は途中で終わっているので、詞章を加えて［次第］に始まり［次第］と同文で終わる完備形式の曲舞にした。

やがて今回の眼目〈白拍子ノ舞〉に移る。満開の桜の花の下、袖を翻し、鼓に合わせて足拍子を踏み、時々執心の鐘を見遣りつつ、美しく、艶麗に舞い、観客を魅了していく。男の乱拍子といえる〈翁ノ舞〉に着目し、その面白さを存分に引きだすとともに、女が舞う《道成寺》の乱拍子の技法も生かした、浅見氏の卓抜な創造力に敬服することもしばしばで、今回の台本で新しく挿入した、漢詩（「長楽の鐘声は花の外に尽きぬ、龍池の柳色は、雨の中に深し」）と、原作にある和歌（「山寺の、春の夕暮れ来て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける」）を朗詠し、和漢の詩を響かせつつ、袖を翻して舞い込むその芸態は、白拍子の風姿・芸態を現代に見事に蘇らせたといっていい。復曲には、学術的正確さもさることながら、現代に生きる芸能としての魅力が第一であり、それを中心に据えたことが効を奏したと思う。

「山寺の、春の夕暮れ来て見れば、入相の鐘に、花ぞ散りける」の和歌の、「花ぞ散りける」のリフレインのうち、女は鐘への執心が募り、ついに鐘に飛び付く。目も鮮やかな鐘入り。後見との呼吸も万全で、鮮烈な鐘入りだった。

鐘の落下に驚いた能力（寺男）たちが住侶（ワキ）に報告。ここの間狂言の詞章は現行《道成寺》のそれにほぼ準じた。本当は浅見氏も我々も全部新たに創作したかったが時間がなく諦めたもので、十月二十一日に行われた「浅見真州の会」での再演では、創作台本が実現し、その他の演技演出についても、練り直したこともあって好評だった。ワキの語リの演技も、初演の際は現行に従ったが再演では、ワキツレたちと能力たちが座して左右に居並び、ワキは真ん中に座して語る形にした。これも浅見氏の希望。

後場は、僧たちが祈ると、鐘が上がり、蛇体が姿を現す。威

嚇する蛇体と調伏祈祷する僧たちとの、激しい抗争。ここも迫力があり、やがて前述の結末を迎える。哀愁感と、静かな余韻さえ感じられるラストシーンだ。初めて能を見たゼミの高橋佳子君が「般若の面をつけた蛇は、寂しそうに、けれども一瞬、穏やかな表情を見せたような気がするのは私だけでしょうか」（『法政』一九九二・七～八）と綴っているが、私も同感だ。

かくて一時間五十分の《鐘巻》は拍手のうちに終わった。当日の私は楽屋に詰めていて、舞台も地謡裏の御簾の間から見ていたが、無事終わってホッとした。その夜、演者たちと酌み交わした酒はことのほかうまかった。

当日はＮＨＫのカメラが入り、録画。教育テレビの、九月二十三日朝九時から十時十五分までの番組で、一部をカットして放映したので、ご覧になった方もおられるかもしれない。また再演をご覧になられた方も含め、ご感想をお寄せいただきたい。

（にしの　はるお・文学部教授・能楽研究所所員）